

# 〈新刊紹介〉

清水文雄先生著

## 「河」の音

「河の音」は、清水文雄先生が、折りにふれて書かれた随想の中からいくつかを選んで、一冊におまとめになったものです。四年間、教室で教えを受けた清水先生を思いながら、わたしたちは、このように読みました。

F 「『二十才のエチュード』」に書かないではいられない気持の方が強くて、ともかく書いてみることにした。そして、いざ筆をとって書く段になると、この拙い文章に共鳴してくれそうな、だれか特定の人に話しかけたいところ、先生の淡々とした講義の口調がよくわたしたちの話題になるけど、何かがあるんじゃない？」

N 「そう。講義のときでも、ひとりひとりの孤に向かって話される気がする。」

F 「先生は仕方なしに書かれたり、言ったりされることはないだね。何があっても感動にかられて書かれる。しかも、共感し

てくれることがわかってる相手に。強い誇りをもっていらっしゃる。だからかえって、淡々とした態度になる。かたまり口は淡々としておられても、先生の語らばにはいられないものが、考えてみたら、よくわかっている。ふしぎね。」

N 「ふん」

F 「そういえば、〃後ろ姿〃に、斎藤清衛先生のことにつれ、先生は他人に対してたいそう寛容でいられるに引きかえ、自己を責めることきわめて厳格な方である。これは、先生御自身、自分は他人の生涯に立ち入り、他人の運命にかかわることをひどく怖れる性分である、と述懐していられることも関連する。(中略)反省してみると、私自身の基本的な生き方が、先生のこのような姿に知らず知らずのうちに影響されていたことを否むわけにはいかない」と述べておられるけど、これとも関連があるね。」

N 「そんな中で、一方では厳しく求めておられるから、あの淡々とした中にも何かを感じるんだね。」

F 「だから、淡々としていらっしゃる、というところだけを見てはいけないうわね。」

N 「ああ、わたしたちが合宿した時、先生がおっしゃったでしょう。現代は、この第二次大戦ですべての価値が崩され、今、新しい価値を自分で作らなければいけない時だ、というような意味のことを。あの時はじめて戦争について言われて、びっくりした。だけど、そのことは先生がずっと考えていらっしゃったことだったのね。」

F 「ふーん。」

N 「この『河の音』の中には、『深淵のよいうな意識の空洞』(〃Y氏への手紙〃)などのように、戦後の気持ちを表わしていらっしゃる……。その内容はわからないけど。」

F 「ふーん。そこが問題じゃない。戦争によって崩れたものがあるのよ。〃蓮田善明のこと〃などで感じられる。具体的にはわからないけど。」

わたしたちに戦争体験がないということでは、大きな何かよ。」

N 「わたしたちに何となくわかるのは、先生の、戦後の発見とか、再確認とかよ。多くの人の心との出会いによって、先生が書いておられるもの。」

F 「例えば、〃やまかは』と『新月』〃

の中に、『最期に臨んでは、はるかなる故  
国の山河に寄せて、そのうえに永遠の自由  
と平和を祈念しつつ死んでいった』とある  
ように、戦争で亡くなった人たちは大死で  
はないという訴え——。そして、それが  
文学として残ったことで、「この国の文  
学への信頼」をあらためて思っておられ  
る。」

N 「小説『有心』について〃や、〃文学  
的感想〃、〃挽歌〃、〃花のひらくよう  
に〃、〃歌集『風土』を読む〃などでは、  
戦争（戦争のもたらしたものと）と文学と先  
生との接点がよみとれるように思うんだけ  
ども。つまり『外界も内界もひとしく空虚  
として、生きること自体が妙にうっとし  
く思われたあのころに、この片々たる冊子  
が、どんなに勇気を与えてくれたことか。  
たとえば編集後記のわずか数行の短文から  
も、生のあかしを読みとった喜びは、今も  
忘れることができない。』（〃花のひら  
くように〃）というように表わされた接  
点。」

F 「そうね。

ところで、先生の文学が出たけど、先生  
は、『私には、『和歌的なもの』を根こ

そぎ払拭することが可能とは思われない』  
（〃歌に憑かれた青春〃）といわれている。  
先生の文学を語るとき和歌は切りはなせな  
いと思うけど。」

N 「ふーん。〃和泉式部ノート〃、〃はか  
なきこと〃〃歌集『海の琴』を読んで〃、  
〃浜藤の花〃など、ほとんどが和歌を対象  
としたものだね。『伝達不可能と自省され  
た孤独の心情が、わが民族に普遍的な形式  
をその容器とするという、逆説的な結合  
……』（〃はかなきこと〃）とあること  
が、裏付けとなるかしら。」

F 「ちょっと、ごらん。女の人がほとんど  
よ。文学には、女性を欠くことができない  
よ。それを、さりげなく示してくださって  
いるのが清水先生。」

N 「そういうこと、言っていない？」  
F 「いいよ。」

わたしは教師になって、はじめて、社会  
人としての女性であることを考えなければ  
いけなくなつた。そんな時、この『河の  
音』読むと、先生は女性を精神の連帯者と  
して扱っていらっしやるので、うれしかっ  
た。」

N 「うん、うん。わたしも、この『河の音』

を読んで、わからないことも多かつたけ  
ど、いろんなこと考えた。忘れていること  
に気付いたし。やっぱり、自分の価値を支  
えてくれるものが、どこかにあるという気  
がする。

だけでも、よく読んでみると、一語一語  
のことばは、決して淡々としていない。」  
F 「わたしは、先生の「教育」即「文学」  
即「生活」だ、ということを感じる。毎  
日、今日もつまらん授業だった、としよば  
くれているわたしは、せめて教育と文学を  
一致させたい。」

（B6判、三四三ページ、昭和四十二年  
三月、王朝文学の会刊）

昭和四十一年度卒業 古山節子  
中村訓子

「河の音」購入ご希望の方は、少々残部  
がありますので、左記宛、実費（送料とも）  
三九〇円をそえて、お申し込みください。

広島市東千田町

広島大学教育学部国語教育研究室

（振替） 広島一〇二九五